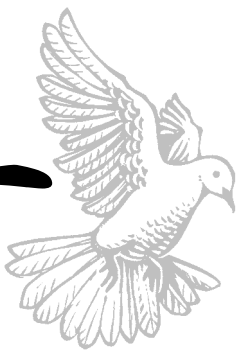


伝書



所長ご挨拶



ジョン・キャンベル教授(政治学)が退職しました。正式には退職しておらず、徐々に引退していく形をとっていますが、実際的には教職というキャリアの最終地点に到達しました。私は通常、このコラムの大部分を特定のCJS教員のために使うことはしないのですが、今回は正当な理由があります。私の手元の資料が正しければ、ジョンの1980年代のCJS所長在職期間は、ほぼ60年にわたるCJSの歴史の中で最長の連続在職記録です。

ジョンの所長としての仕事は、CJSを今日ある姿に形づくる役目を果たしました。私は彼の助言やセンターの歴史に関する知識に時々頼れることを嬉しく思っています。さらに私は、常日頃から彼の学者としての仕事の大ファンでもありました。ジョンの早期の仕事は彼に国際的な定評をもたらしましたが、私は実はどちらかという彼の後期の仕事のファンです。彼の後期の仕事は、非常に複雑な現象(この学問分野において「政策はいかに変化するか」という質問ほど回答が困難なものがあるでしょうか?)について素晴らしい説明を提供するもので、経験という丸い杭を人為的な理論という四角い穴に押し込もうと試みるようなものではありません。

しかし、そうしたことは印象的ではあっても、単に履歴書上のことにすぎません。ジョンがCJSにとって長年にわたりこれほど慕われる対象となってきたのは、彼がただもうジョンだという事実からなのです。正直で、親切で、何でもありで、思いやりのあるジョン。8年前、私がミシガンへの転職を熟慮している時、彼は私を東京大学の赤門近くの煮詰まりすぎたコーヒーを出す店に連れて行ってくれ、ミシガンのキャンパスで起こっているエキサイティングな日本関連の諸々を私に売り込みました。(私はジョンの記憶よりはどんなに悪くても自分の記

憶の方を気に入っていますが、その私の記憶が正しければ、ジョンはウェイターにコーヒーがとても不味いと伝え、そのくせして飲み干したのでした。)私は、ジョンの過去および現在の学生の数多くと話をしました。彼らは、ジョンを、メンターとしての役割を重んじる教師、学生に自分の潜在的可能性に到達するよう挑戦する人物である、と描写しています。CJSでは、私、ジョンがやや長くなりすぎた委員会の協議をため息まじりのリズミカルなイントネーションで「まあとにかく…」と切り出して終了するやり方を、とりわけ気に入っています。それから、私がジョンを会議のために東京からアン・アーバーに戻らせ、ジョンは結果的に多額の税制上の罰金を支払うことになった、とジョンが私を責め続けている話があります。でも、日本の保健関連政策問題についてのパネル・ディスカッションを、どうしてジョンなしで開催できるというのです?

私たちはアン・アーバーで今後も変わらずジョンに会うことができるそうです。そして別の日本専門の政治学教員を見つける対策が既に取られているとのこと。私がここで「後任」という言葉を用いなかったことに注目してください。

今季号では、サイデンステッカー教授や非常にエキサイティングなシリーズになると思われるヌーン・レクチャー・シリーズのちょっと傾向の異なる一部の参加者を含め、さらに多数の興味深いキャラクターについて言及されています。こうしたキャラクターに新しく加わる新任キャスト・メンバー、すなわちオフラ・ゴールドSTEIN＝ギドニ(トヨタ招聘客員教授)、ジョナサン・ズウィッカー(CJS最新メンバー)、デイビッド・ローゼンフェルド(CJS最新の客員研究員)に対してご挨拶するとともに歓迎いたします。

まあとにかく…。

所長

マーク・D・ウエスト (Mark D. West)

出版会より

動物、映画、そして 平安時代の女性作家 に関する新刊

足の速い馬から儀式のために殺戮された鹿、そして象徴的な蛇まで、人間以外のあらゆる種類の動物は、日本として知られる文化コミュニティの構築に最古の初期から参加してきました。しかし、この革新的な書籍の著者の主張によると、これまで普及している歴史的説明では、われわれの仲間である動物を物語や媒介の領域の向こう側にある無言で良質な「自然」に格下げしています。では、人間以外の生き物を過去の観点の領域に還元すると、何が起こるのでしょうか?

グレゴリー・M・フルーグフェルダー(コロンビア大学)とブレット・L・ウォーカー(モンタナ州立大学)の共同編集による『JAPANimals: History and Culture in Japan's Animal Life (ジャパニマル: 日本の動物ライフの歴史と文化)』(ミシガン日本研究シリーズ第52巻、ISBN 1-929280-30-0、クロス装丁60.00ドル、ISBN 1-929280-31-9、ペーパーバック25ドル)は、日本の現代の学問を形成してきた基本的な想定が多くに挑戦し、新しい観点から経済成長、外部世界からの孤立とそれとの相互作用、征服と帝国のツール、近代性の性質などの問題に取り組んだものです。

この挑発的なコレクションは、一つのエッセイから次のエッセイへと、読者に、我々の人間性ならびに歴史の範囲の瀬戸際に存在する生き物の多様性を認識させます。

近年、新メディアや新テクノロジーの影響が、映画および映画評論の出現への関心を改めています。しかし、今日までの

目次

図書館
司書より 2



厄介なもの 2



センター
催し物 6



これまでの
催し物 7

教員・アソシエイト短
信 8

学生・卒業生
短信 9



お知らせ 12

カレンダー 14

二点の大規模購入

2年間空席であったアジア図書館長の求人が、去る4月に始まりました。この人事上の課題を別として、当図書館には変更が一つあります。アイリス・リュウ（劉）が図書分類助手（中国語・日本語・韓国語文献目録作成者）の職に就きました。彼女は2005年6月1日にこの新しい役職に正式就任しました。

当図書館の日本語文献の購入に関連する発表は2件あります。第一に、アジア図書館は今年、NCC MVS プログラム（北米図書館日本文献協議会の大型セット蒐集プロジェクト補助金）を通じて新しい資料を授与されました。ニュースレター2005年冬季号に説明したとおり、当図書館は三つの文献について申請を行い、そのうち一つ、すなわち『東亜同文書院中国調査旅行報告書』を受け取りました。これは全136リールから成るもので、これにより、数年前に『東亜同文書院大旅行誌』（全14リール）の購入に始まった一連の購入が完了しました。両セットとも愛知大学により編纂され雄松堂により出版されたものです。これら二組のマイクロフィルムのセットは、近代中国史、ならびに上海に日清貿易研究所という名の最初の協会が設立された1890年に始まる日中関係史の真にユニークな研究資源といえます。日清戦争後、同協会は1901年に東亜同文書院という新しい名称の下にビジネススクールに生まれ変わりました。その後、東亜同文書院は、東アジアの知識人の人生において独自の位置づけを得ました。

これらマイクロフィルムは、大学院生が中国全土にわたり実施した一連の調査旅行を通じて東亜同文書院が実現した最も卓越した学術研究の集大成です。調査旅行の期間は、一般的に、3ヶ月、6ヶ月、対象地域によっては時には6ヶ月以上にわたりました。こうした旅行は、50年間にわたり、中国全土から鉱業、製塩業、製油業、木綿およびその他の農業製品、事業および経済、教育、移民、およびその他に関するデータを収集しました。これ以前には北米では中華人民共和国設立に先立つ他のデータは入手不可能であることから、この集大成は素晴らしい情報源にほかなりません。当大学または大学間ローン制度を通じて自分の大学の図書館からこの情報源にアクセスする他大学の学者は、これを貴重なものとするでしょう。

第二の重要な購入は、「Gordon W. Prange Magazine and Newspaper Collection（ゴードン・W・プランジ雑誌新聞コレクション）」のマイクロフィルムの大コレクションです。これは1945年から1949年に日本国内で出版された刊行物の最も総合的な集大成であり、米国内でこのコレクションを所蔵しているのは、メリーランド大学（原本所有者）、ハーバード燕京（イェンチン）図書館、そして当アジア図書館の、わずか3ヶ所です。

同コレクションは、シルバーハライド・マイクロフィッシュ62,977枚の雑誌、35mmシルバー・マイクロフィルム3,826リールの新聞、そしてその他の資料から構成されています。原本は、SCAPと呼ばれた連合国最高司令官の民間検閲支隊によって分類、整理、維持されました。SCAPは、戦後の占領期間中に日本国内で出版されたあらゆるものを受け取り、SCAPが収集した資料はすべてメリーランド大学に寄贈され、その後、ダグラス・マッカーサー元帥の総司令部の史料局に勤務した経験のあるゴードン・W・プランジ博士（歴史学教授）により編集されました。

この巨大なコレクションの特徴をすべて説明するにはもっと紙面を割く必要があります。しかし、ここではまたもや、「当史料につきましては、当図書館までご連絡のうえ、まず試にご覧になってからご自分の研究にご利用ください」と言わなければなりません。

アジア図書館日本部部长
仁木賢司

厄介なもの

生かじりの日本語の知識を持つ人は誰でもおそらく、その生かじりの知識に気づいた日本人からほとんど同じような返答を受けるでしょう。

まず、どれだけ頻繁に聞いてもむしろチャタリングといえる返答があります。私が気に入っていると思うのは「おや、日本語が大変お上手ですわね」です。

また、最初は戸惑い、やがて迷惑に思え、頭にさえる返答もあります。おそらくその最たるものは、「あなたは私より上手に日本語を話すすわね」でしょう。これはもう、真っ赤な嘘としか言いようがありません。当惑が残ります。日本人は全員、これが嘘であることを知っているはずで、ではなぜ、あれほど多くの人々がこれを口にするのでしょうか？そして彼らは皆、いったいどの時点でそれが口にするべき言葉であると学ぶのでしょうか？母親が子供に教えるのでしょうか？「こちらに歩いてくる変てこりんな生き物は、外人よ。外人があなたに分かることを何か言ったら、日本人よりも上手だって言わなくちゃいけないのよ。」

私がかれよりもっと迷惑に思う返答は、そのほぼ正反対の「日本語は非常に難しい言語です」というやつです。人々は常に、この二種類の返答をあたかもその矛盾に気づいていないかのように矢継ぎ早に用います（たぶん、これらは皆どちらかというも無意味であるゆえ、矛盾に気づかないのでしょうか）。

それに対する私のお気に入りの返事はこうです。「あらゆる言語は難しいものです。」これは真実だと思います。私が精通している言語の中では、スペイン語が最も親しみやすくアプローチしやすいと私は思っています。スペイン語を母国語とする人が理解できるように発音することは簡単です。この意義は容易に経験できます。メキシコシティに初めて到着した者でも、3、4日もいれば、標識がすべて理解できるようになります。しかしこれは、上手に話すことと書くことが簡単であるという意味ではありません。純粋な流暢さは、時間と練習によってのみ、達成されるものです。

日本語は非常に厄介なものとなり得るということを否定したくはありません。どの言語にも独自の妙な複雑さがあり、日本語の場合は残酷なまでに複雑に思えることもあります。そこでこのことについて、二つの点に関して長々と述べたいと思います。そしてこの二点だけではないことを示唆したいとも思います。

第一の点は、昨日勉強を始めたばかりの学生にとってさえ、新しい話ではありません。つまり、書記法の複雑さに関する話です。これは日本語のひねくれ加減の驚くべき典型例と考えられます。有名な英国の日本史学者であるジョージ・サンソム卿はかつて、説明に別の方法を必要とするような書記法には、どこか間違っているところがある、と述べました。（こうしてジョージ・サンソム卿を持ち出すとは、私はわざとと謙



エドワード・サイデンステッカー、『New Leaves: Studies and Translations of Japanese Literature in Honor of Edward Seidensticker (ニュー・リーヴス: エドワード・サイデンステッカーに敬意を表した日本文学の研究および翻訳)』(Gatten and Chambers, CJS)の表紙から。

遜めいた態度をとったことになるのでしょうか?よく分かりません。ただ一つ言えることは、私が若い時分に顕著であると見なされていた人々は急速に忘却のかたに消え去りつつある、ということです。)日本人が書き言葉を持つと着手した時、不運なことに彼らの目の前には引き継がれるのを待っている非音声表記法しかなかったのだ、といえるかもしれません。しかし、これは韓国人にとっても同じことで、それでも彼らは、日本人と同じような複雑さに帰着しませんでした。原則的に、韓国人は、中国文字1字に対して読み方を1通りずつ割り当てたのです。日本人は、時には1ダースほどを割り当てたのです。韓国語の新聞は、音声表記法であるハングル文字に完全に移行しています。日本人は、仮名に移行することは簡単ではない、と言います。どうですかねえ。移行したくないだけなんじゃないの、と私は疑っています。

私が提起したい第二の点は、言語の変化の急速さです。ここでの強調は、「変化」ではなく「急速さ」に置かれるべきです。言語の変化を阻止できると考える人々は、私が読んだところによると相当多数のフランス人が含まれますが、現実離れています。言語はすべて、速かろうが遅かろうが変化します。フランス人の懸念がフランス語の変化のスピードを鈍化させることにあるのであれば、深く同情します。私が精通している言語のうち、日本語が最も急速に変化しています。これには頻繁にまごつかされ、時には気を狂わされそうだと思います。

私は変化すべてに反対しているのではありません。変化すべてに反対することは、そもそも非現実的であり、よい変化もあるという私にとっては明白な事実を否定することにもなります。私は既に、別の前後関係ではあったものの、よい変化が生じた事象に言及しています。

自分の子供に外国人への対応方法を教えた女性は、ほぼ間違いなく、外国人に「外人」という表現を用いました。外人は、「alien」または「outsider」という意味ですが、実際上はそれよりはるかに狭い意味を持っていました。つまり欧州系の人物を言及していたのです。日本国内でだんとつに最も人口の多い外国人である韓国人は、外人ではありませんでした。彼らは、「persons of third nations」を意味する「第三国人」という奇妙な指定を受けました。外人という表現は、おそらくは犯罪に言及する際に最も一般的に用いられました。「外人犯罪」は、欧州系人物による犯罪を意味し、米国人が最も一般的な欧州系であることから、自動的に米国人による犯罪という意味にとられました。もう何年も前のことですが、東京の北部であれば愉快的銀行強盗があり、この用語のせいで、誰もが米国人がやらかしたものと想定しました。結局、犯人はフランス人でしたけど。

さらに、こうした用法のため、この語は次第に元来意味すべきこと、すなわちあらゆる人種または国籍の外国人を意味するようになってきました。欧州人種は今では少数派です。中国人やたいはいは日系ブラジル人である中南米人が犯す犯罪件数は、あらゆる欧州系を合計した犯罪件数を上回っています。これは、最も幸運な進展であるとはいえないかもしれませんが、単語がそれが意味すべきことを意味するようになれば、我々全員にとってその方がいいのです。儒教的正名が行われています。全体的にはこれは歓迎されるべきことです。おそらくここでの説明にはほとんど関連性はありませんが、日本人がひどく軽蔑している韓国人は法律を遵守しています。これは私が首を突っ込むようなことではないのですが、韓国人はもっと公正に扱われてもよいと思います。

どの言語にも
独自の妙な
複雑さがあり、
日本語の場合は
残酷なまでに
複雑に思える
こともあります。

変化の急速さは、面倒な問題です。私がある程度知っている外国語の中で、日本語が最も変化に対する受容力のある言語である、と私は思います。日本語を勉強し始めたばかりの若者は、半世紀以上もそれに取り組んでいる者でも常にそれがあたたかも新しい言語であるかのようにアプローチせざるを得ない様子を知って、失望させられるかもしれません。しかし、ああ悲しいかな、これは真実なのです。私は、私の問題の大半はハイテク関連の語彙を習得する能力が欠如していることから生じている、とためらいなしに認めます。私は、私の母国語でも同じ問題を抱えています。少しでもテクニカルなことの大半は理解不可能です。

最近、残念なことに、私は、もはや自分の東京のアパートをきちんと維持できない、と判断しました。私は援助を求めて区役所に足を運びました。私は、いずれにしてもそれまで区役所であったところ、に行ったのでした。そして中に入る前に、そこはもはや確固たる漢字3文字で指定されていないことを発見しました。そこには一列のカタカナが鎮座していて、一瞬の思慮の後、それが「シビックセンター」と伝えていることが判明したのでした。

さて中に入ると、私はカタカナの奔流に直面しました。その大半は英語を伝えていることが即座に理解可能でした。私は英語の優位性を共有できない外国人をたいそう哀れに思います。前後関係から少々ぶっきらぼうで友好性に欠けると見受けられたものの「ディスプレイサービス」であると私が思った単語があったのですが、今ではあれは「day service」だったのだと結論を下しています。「シルバー・サービス」にはそれほど苦労しませんでした。これは「tableware」を表したものである可能性もあったにしろ、私のバスのパスが私の髪の色を言及する「シルバー・パス」として知られていることを知っていたからです。この例も疑いなく、私のふさふさした銀髪に言及したものでした。

外部からの影響に対する受容性は、過剰性がそれほど厄介なものでなければ、すべて良いことであるといえるでしょう。英語は全体的に大陸の言語よりも受容性があります。ドイツ語はドイツ語、フランス語はフランス語のまま留まっていますが、英語は古典語とフランス語から無制限に摂取しています。その結果、英語はおそらく世界で最も豊富で多様性のある語彙を擁しています。

借用が始まった当時、英語とフランス語の二言語のうちフランス語の方がはるかに洗練された言語でした。日本語と中国語の場合も、日本語が中国語からの借用を開始した時には同様でした。私は、日本人は英語から借用したことで大失敗を犯したと思います。日本人は最初、新しい語彙を日本語版中国文字に翻訳していました。これは全体的に首尾よくいっていました。例えば、「電話」の意味はその文字から誰でも容易に推測できます。失敗はカタカナへの変換なのです。

そこで私は謙虚な提案を行います。借用語はローマ字のまま残す、というのはどうでしょうか？これは、キリル文字とギリシャ文字の支持者の気分を害するかもしれませんが、彼らの憤慨はそれほど表される機会もないでしょう。最初のうちは日本語の植字工にとっては試練かもしれませんが、彼らは器用な人たちです。まもなく容易かつ沈着に仕事をこなすことでしょう。

エドワード・サイデンステッカー
(Edward Seidensticker)





CJS追悼の辞

教育心理学者で元CJS所長（1990～91年）でもあるハロルド・W・スティーブソン名誉教授が、長期にわたる闘病後、7月8日にカリフォルニア州バロアルト市で亡くなりました。スティーブソン教授は、1947年にコロラド大学を卒業、Phi Beta Kappa に選ばれました。その前には、第二次世界大戦中に海軍入隊を決定し、コロラド大学の海軍外国語プログラムで日本語学習のための面接を受けるよう招待されました。彼の生涯を通じての日本との関係および日本研究が始まったのはそこでのことでした。その後、スタンフォード大学から心理学で修士号を、同じく1951年に博士号を取得しました。1959年からミシガン大学に就任した1971年までは、ミネソタ大学の小児発達研究所の所長を務めました。ミシガン大学では、小児発達・社会政策プログラムを率い、2001年に退職するまで30年間にわたり活動を続けました。スティーブソン教授は、世界でも著名な研究者としての権威あるキャリアを通じて、『Child Development and Education in Japan (日本における小児発達および教育)』（WH Freeman, 1986年）やJ・W・スティグラーとの共著である『The Learning Gap (学習格差)』（Simon and Schuster, 1992年）など、広く読まれている書籍を数冊執筆しました。さらに、欠くことのできないCJS教員メンバーとして、CJSの大学院生入試・フェロースhip委員会、教員フェロースhip委員会、日本学教員採用委員会、

執行委員会のメンバーを務め、また前述したとおり、1990年代初頭にはCJSの所長も務めました。退職後は、ミシガン大学の人間成長発達センターのフェローとして研究と執筆を継続し、東アジアの小児および東アジアと米国の小児の比較に焦点を当てました。スティーブソン教授のご遺族は、妻ナンシーさん、娘3人、息子1人、兄弟1人、孫7人です。

（CJS最後のハロルド・スティーブソンとのインタビューにつきましては、<http://www.umichi.edu/~iinet/cjs/about/newsletters/w02.html>をご覧ください。）

CJS卒業生であるオヤマダサトシ氏が、2005年2月1日に日本の名古屋市で亡くなりました。オヤマダ氏は、日本最大の自動車部品供給会社である日本電装株式会社（現在は株式会社デンソーとして知られる）を購買部門本部長として退職してまもなくCJSプログラムに入学した、稀なタイプのCJS学生でした。1950年から日本の自動車産業界を勤



マーク・ウエスト所長と
ジョン・キャンベル教授

め上げた上層幹部エグゼクティブとして、ビジネスを裏の裏まで熟知し、在学中（1988～90年）は多くのCJS学生にとって貴重なリソースでありコネクションでもありました。

CJS、ジョン・キャンベル教授のセンターへの長年の献身に対して感謝

ジョン・ホイットニー・ホール記念刊行図書

CJSは、田辺龍郎氏より、ジョン・ホイットニー・ホール記念刊行図書基金への寄付金を頂戴しました。同基金は、CJSの50周年を記念したベティ・ホール氏からの寛大な寄付をもとに設立されたものです。田辺氏は、CJSへの書状の中で、ジョン・ホール教授は「米国のみならず日本でも最も有名な歴史学者」であると述べられ、さらに、ホール教授が日本の学者に高く評価されている国際会議を日本で組織したことも指摘されています。CJSは、田辺龍郎氏のご思慮とご寄付に深く感謝いたし

ます。また、CJSとCJS関連活動を支援し続けてくださる世界各地の方々にもお礼を申し上げます。

ジョン・ホイットニー・ホール文献として選択された書籍を出版するためのジョン・ホイットニー・ホール基金、またはその他のCJS関連基金への寄付金につきましては、ミシガン大学を受取人とした小切手をCJS宛にお送りください。その際には小切手上に基金の名称をご指定ください。

セ ン タ ー 催 し 物

2005年秋の映画シリーズ

CJS映画シリーズ30回を記念して、企画担当の阿部マーク・ノーネス、マイケル・ヘイスティングス、ジェーン・オザニッチは、日本映画の専門家3名をシリーズに招きました。上野俊哉（和光大学）、ジョンサン・ホール（カリフォルニア大学アーバイン校）、クリスティーン・マラン（ミネソタ大学）はそれぞれ3夜ずつ、CJSのために上映映画を構成してくれました。上映は毎週金曜日に行われ、9月30日に開始、12月2日に終了しました。さらに、この3名はそれぞれ、秋学期中にアン・アーバーを訪問し、CJSのヌーン・レクチャー・シリーズの一環として講演を行い、自分が選択した映画のうちの1作の上映に出席し、上映後には非公式の映画ディスカッションに参加しました。映画およびキャンパス訪問に関する詳細情報につきましては、<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/calendar.html>をご覧ください。

今後の催し物の
総合リストに
つきましては
第14ページの
カレンダーを
ご覧ください。

2005~2006年ヌーン・レクチャー・シリーズ

CJSのヌーン・レクチャー・シリーズは、今年は、誰にでも楽しめる内容と、幾つかのサプライズを用意しました。まず、著名なハリー・ハルトゥニアン（ニューヨーク大学歴史学部）を光栄にも当キャンパスに迎えました。また、シリーズにより大衆文化的な面を加える意味で、テッド・ハイド（シアトル・マリナーズ、パシフィック・リム・オペレーションズ・ディレクター、）を招き、「Yakyu vs. Baseball（野球対ベースボール）」について講演してもらいました。また、日本の有名なパロディストであるマッド・アマノが1月19日にシリーズに参加します。シリーズ後半には、イアン・コンドリー（マサチューセッツ工科大学外国語・文学部）が「Hip-Hop, Japan, and Cultural Globalization: Japanese Rappers Look at 9/11（ヒップホップ・ジャパンと文化的グローバリゼーション:

日本のラッパーが見た9・11）」と題する講演で日本の大衆文化を観察します。シリーズ全体の最新の更新スケジュールにつきましては、<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/noon.html>をご覧ください。



オフラ・ゴールドSTEIN=ギドニ教授

2005~2006年度トヨタ招聘客員教授

オフラ・ゴールドSTEIN=ギドニ（テルアビブ大学社会学・人類学・東アジア研究準教授）は、CJSが1988年にプログラムを開始して以来30回目のトヨタ招聘客員教授として、2005~2006年の学年度をアン・アーバーで過ごしています。専門は、人類学、日本文化、日本社会、ジェンダー問題、日本の女性です。2006年冬学期には「Women in Modern Japan: Anthropological Perspectives（現代日本の女性たち：人類学的観点から）」と題したコースの教鞭をとり、さらに2月2日にCJSのヌーン・レクチャー・シリーズの一環として講演を行います。

日本の金属美術工芸家、ミシガン大学を訪問

建築・デザイン学科、CJS、レジデンシャル・カレッジは共同で日本の金属美術工芸家であるすぎもりえいとくをミシガン大学キャンパスに招聘しました。緑青の専門家であるすぎもり氏は、学生たちに面会し、また、ノース・キャンパスの建築・デザ

イン学科のメタル・スタジオで日本の伝統的緑青技法の公開実演も実施しました。これは一般公開のイベントでした。

2006年お餅つき

CJSの2006年お餅つきは、1月7日土曜日午後1時から4時までの予定で開催されます。更新情報につきましては、<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/calendar.html>をご覧ください。

友沢幸男物理学名誉教授、2005年お餅つきにて



ケント・デリカット、CJSで講演

「日本のデイヴィッド・レターマン」と称されたこともある日本の芸能界の有名人であるケント・デリカットは、10月4日夜、CJSで日本のエンタテインメント業界について講演を行いました。デリカット氏は、自ら設立した貿易会社（デリカット・インターナショナル・カンパニー、DICO）を発展させるために1983年に家族とともに日本に移住しました。来日してまもなく日本のTVバラエティ・ショーへの出演依頼を受け、それが日本のTVでのキャリアの始まりとなり、後には映画制作にまで拡大しました。同氏は今日もエンタテインメント業界とビジネス界の両方で活躍を続けています。今回の講演は一般公開で、講演の直後には、インターナショナル・インスティテュート・ギャラリーでレセプションが開かれました。

これまでの催し物



アン・アーバー・ブック・フェスティバルのインターナショナル・パビリオン

5月21日、第2回アン・アーバー年次ブックフェスティバルと銘打ってストリート・フェアが開催されました。CJSとミシガン大学インターナショナル・インスティテュート(II)の他のセンターのこのイベントへの参加は今回が2度目です。今回は、CJSがIIを代表し、世界中のあらゆる地域からの大人向けと子供向けの推薦図書などを含めたインターナショナル・パビリオンを組織しました。パビリオン訪問者は、書籍のセレクションをぶらぶら見て歩きながら、外国の民族舞踊に参加したり、離散したアフリカ人の語り、日本の琴と尺八の演奏、インド音楽、エジプトの象形文字グラフィとアラビア文字の筆記実演に興じたりしました。

アン・アーバー地区の琴・尺八グループ、雅(みやび)、インターナショナル・パビリオンで演奏



2005年ジャパン・ボウル

CJSは、3月5日にミシガン大学でミシガン・ジャパン・ボウルを主催しました。このイベントがミシガン大学で開催されたのは今回が初めてのことでした。19校250名を超える小学校、中学校、高等学校の生徒が参加し、ジャパン・ボウルの12年間の歴史で最高の参加者数を記録しました。生徒たちは、クイズ大会でチームに分かれて競い、自分の日本語や日本文化の知識を試しました。また、生徒、家族や教師、そして一般市民は、茶の湯、書道の実演と稽古、生け花の展覧、剣道の実技を含めた日本文化のイベントや実演に参加しました。イベントのハイライトは、ミシガン大学客員舞踏家である若林淳の舞踏パフォーマンスと、ホワイト・パイン・グリーン・クラブの音楽でした。CJSは2006年にも再び、ミシガン大学キャンパスでジャパン・ボウルを主催します。

CJS夏の映画シリーズ

CJSはCJS映画シリーズ30回を記念すべく、映画評論の世界の大御所であるロジャー・エバートとドナルド・リッチーの2名に、それぞれ本人お気に入りの日本映画3本を選ぶよう依頼しました。両氏はこの依頼に快く応じてくれ、映画3本のタイトルとコメントを提供してくれました。シリーズは、ドナルド・リッチー氏のセレ



クション、『女が階段を上る時』、『赤い殺意』、『火まつり』で幕を開けました。同氏は、これら3作品を特に選んだ理由を聞かれた時、「私が作品を選んだのではなく、作品の方が私を選んだのです」と述べました。また、本人お気に入りの日本映画を提供しただけでなく、映画シリーズの実際の組織プロセスにおいても上映すべきプリント・タイプや入手などについてアドバイスし、大切な協力者となってくれました。CJSは同氏の助力と関心に心から感謝します。ロジャー・エバート氏がシリーズ最初の上映に選択した作品、『生きる』は、同氏曰く、「…私が観た最初の日本映画でした。これはこれまでに制作された最高の映画の一つです。」彼の二番目の選択作品である『浮草』については、ハワイ映画祭でリッチー氏と共に映画をフレームごとに一つ一つ観ていった経験について語り、「私の人生で最も素晴らしかった喜びの一つ」であったと述べています。彼はシリーズ三つ目の作品として北野武の『座頭市』を選び、その理由を「オリジナルのシリーズの継続ではなく、変形であるから」と述べています。CJSは、ドナルド・リッチーとロジャー・エバートの両氏に、また、この夏の映画シリーズに出席された観客の皆様にも、感謝の意を表します。

スーザン・クロウエル (レジデンシャル・カレッジ) 5月23日から7月1日まで、カナダはアルバータ州のバンフ・センター・フォア・アーツの音響・映像アーティスト・レジデンシーに参加しました。このレジデンシーは、カナダ、英国、日本、米国、メキシコからのアーティストを集め、広範囲にわたる技術上、美学上の可能性を交換し探索しました。滞在中は、音の形状と素材が音調に与える効果に関する調査である「フルートストリーム」と題したプロジェクトに取り組み、その結果としてセラミックの「楽器」が生まれ、それをを用いて周囲の相互作用のある音(風、昆虫、人々、その他)を録音しました。

マイク・フェターズ (家庭医学) 6月15日から7月14日まで滋賀医科大学の客員教授を務めました。これは、同医大の吉川隆一学長から同医大の医学教育改革努力における協働を依頼され招聘されたものでした。医学部に席を置き、医学生、看護学生、教員、地域コミュニティ内の医師を対象に、日米の医学教育の相違に関する講義を行いました。また、入院病棟と外来病棟で臨床医学も教授しました。

アイリーン・ガッテン (CJS非常勤研究員) 去る2、3月に南カリフォルニア大学で4日間を過ごし、『源氏物語』、自らの小西甚一著『日本文学史』の翻訳、平安時代の熊野詣について講演を行いました。また5月には、ベニス大学日本文学名誉教授のアドリアナ・ボスカロのミシガン大学初訪問を主催しました。

北山忍 (心理学) 6月15日に特別講演者としてハンブルグ大学に招待されました。6月にはさらにドイツのオスナブルック大学の客員教授でもありました。

近藤純子 (アジア言語文化学) 6月に日本の名古屋市で開催された第3回日本語教育学会研究集会にて「無助詞をクラスでどう教えるべきか:教科書における無助詞の扱いからの考察」と題した論文を共同発表しました。論文の要約は『日本語教育』に

記載されます。さらに7月には日本の名古屋市の佐々木インターナショナル・アカデミーで「Japanese Language education in the United States (米国における日本語教育)」について講演を行いました。

ジョゼフ・S・C・ラム (音楽学) ミシガン大学ハロルド・R・ジョンソン・ダイバーシティ・サービス賞の受賞者5人のうちの1人に選ばれました。2006年春季に「Musiking Late Ming China (1550-1650) (中国明朝後期の音楽:1550~1650年)」と題した学会をミシガン大学に誘致することに対する貢献、およびミシガン・スターンズ楽器コレクション (Michigan Sterns collection of Musical Instruments) での仕事によるコミュニティのダイバーシティ (多様性) の促進が受賞の理由です。

ウィリアム・マルム (音楽学・民俗音楽学名誉教授) 50年にわたる貢献が認められ民俗音楽協会 (SEM) 名誉会員の地位を授けられました。10月18日には50周年祝賀の一環としてアトランタに出張しました。また、8月にはミシガン・スターンズ楽器コレクションのためにスタッフ研修プログラムを指揮し、プリンストンのヘンリー・ルース基金フェロウシップで講演をしました。最後に12月にはワシントンDCの米國務省外交官研修所 (FSI) で講義を行いました。

ゲイル・ネス (社会学名誉教授) 最近、日本の神戸市のアジア都市情報センターの後援により『Asian Urbanization for the New Millennium (新世紀に向けたアジアの都市化)』と題する書籍をブルーム・タワーズと共同編集しました。この書籍はシンガポールのマイケル・カヴェンディッシュから出版されています。

岡まゆみ (アジア言語文化学) 春学期に「Japanese Pedagogy Course (日本語教育学コース)」という新コースを開設しました。これはALCの新コースで今年は17名の学生(日本語のネイティブスピーカー6名、非ネイティブスピーカー11名)が履修しました。さらに、日本語プ

ログラムの他の教員と共に3年レベルの新教科書を編纂するプロジェクトを計画組織しています。このプロジェクトは5月に開始され、パイロット版の2007年夏季完成を願っています。同プロジェクトはフリーマン基金から初稿を起こすための援助金を受けました。

ジェニファー・ロバートソン (人類学) 最近出版された『Companion to the Anthropology of Japan (日本の人類学の手引書)』(Waltham, MA: Blackwell Publishers) を編集しました。さらに、「Biopower: Blood, Kinship, and Eugenic Marriage (バイオパワー:血統、血族関係、優性学的結婚)」、「Introduction: Putting and Keeping Japan in Anthropology (概論:アメリカ文化人類学の中の“日本”)」などの新しい論文をいくつか発表しました。両論文は『Companion to the Anthropology of Japan』に記載されています。また、『Critical Asian Studies』に「Dehistoricizing History: The Ethical dilemma of 'East Asian bioethics' (歴史を非歴史化する:『東アジア生命倫理学』の倫理的ジレンマ)」と題する論文も発表しました。2006年冬学期に履修される「Tokyo-Tel Aviv: City, Nation, and Identity in Japan and Israel (東京-テルアビブ:日本とイスラエルの都市、国家、アイデンティティ)」と題された新コースを開発しました。このコースは近東研究学部のルース・ツォファール教授との共同授業になります。昨年はまた、日本と米国において講演やプレゼンテーションを多数行った他、幾つかの助成金を受領しました。ツォファール教授と共にミシガン大学フランケル・ユダヤ研究センターから教員研究援助金、そして日本とイスラエルの戦争・平和博物館を比較するためのCJS教員研究補助金を受けました。

さらに、2004~2005年度「Anthropology 232: Genes, Genealogies, Identities: Anthropological Perspectives (人類学232:遺伝子、系統、アイデン

ティティ:人類学的観点)」を開発するためにもミシガン大学生命科学・価値・社会プログラムからコース開発援助金を受けました。

ゲーリー・サクソンハウス (経済学) 2005~2006年度のフェローシップを二つ受賞しました。まず、ジョン・サイモン・グッゲンハイム・メモリアル基金奨学金の受理者としてそれを「The Evolution of Labor Standards in Japan: Human Rights, Scientific Management, and International Conflict (日本の労働基準の進化:人権、科学的管理、国際的相反)」のために利用します。このフェローシップに加え、日米友好基金・全米人文科学基金(NEH)からも日本に関する先進社会科学奨学金を受けました。

ヴァーン・タープストラ (国際ビジネス学名誉教授) 5月に韓国ソウル市の朝鮮大学校 (KU) の100周年記念においてミシガン大学ならびにメアリー・スー・コールマン学長を代表しました。韓国滞在中には、国際ビジネスの学部長であった時代 (1977~87年) にミシガン大学ビジネススクールの博士課程の学生であったKUの張炳泰学長と面会しました。

ルース・ツォファール (近東研究) 最近、CJSアソシエイトに任命されました。フェミニスト論、映画、大衆文化、ジェンダー、民族性、語学の戦略と習得、女性学などに関心を持つ助教授です。その関心は日本研究にまで拡大し、ジェニファー・ロバートソン教授と共に日本とイスラエルの戦争・平和博物館を比較するための教員研究補助金を受け取りました。

客員研究員

デイビッド・ローゼンフェルド 新しく赴任したCJS客員研究員です。ミシガン大学から近代日本文学で博士号を取得しました。現在、数件の文学翻訳プロジェクトに関与しています。

CJS卒業生・学生の最新情報

マーニー・アンダーソン (歴史学博士課程学生) 6月に博士学位論文「A Woman's Place: Gender, Politics, and the State in Meiji Japan (女性の場所: 明治日本のジェンダー、政治、国家)」の審査に合格し、2005~2006年の学年度にはマサチューセッツ州ノースハンプトンのスミス・カレッジで教鞭をとっています。

マイケル・アーノルド (CJS 修士課程学生) 東京の明治学院大学でイトウ奨学生として2年目を過ごしています。

アニー・ホガート (CJS 修士号1995年卒) 4月に、日本の中学校のカリキュラムにおける新規の総合学習コースに関する「Teacher Learning for Curricular and Instructional Reform in Japan: A Case of Continuous Improvement (日本のカリキュラム・指導改革における教師の学習・継続的改善のケース例)」と題した博士学位論文の審査に合格し、ミシガン州立大学教育学部博士課程を修了しました。また6月には、シエナ・ハイソ大学ミシガン州サウスフィールド・キャンパスの夏期講習会にて、テクノロジーとオンライン情報源に焦点を当てた日本語・日本文化教師のための研修を成功裡に率いました。

ヘザー・リトルフィールド (CJS 修士課程学生) 日本の岡崎市での研究のために2005年夏期FLASを授与されました。

ウィリアム・ロンド (歴史学博士号2004年卒) 2004~2005年の学年度中はペンシルベニア州のセント・ヴィンセント大学で歴史学の助教授を務めました。2005~2006年の学年度には、フロリダ・アトランティック大学の客員助教授です。

ホイット・ロング (日本文学博士課程学生) 現在、東京で学位論文の研究、執筆中です。日本学術振興基金からの短期助成金が、20世紀初頭の日本における、特に作家宮沢賢治に焦点を当てた、文学的生産と文化的生産の地理に関するプロジェクトの援助に役立っています。さらに、もうすぐ出版されるCJSの新刊『JAPANimals: History and Culture in Japan's Animal Life (ジャパニマル: 日本の動物ライフの歴史と文化)』(ブレット・ウォーカーとグレッグ・フルーグフェルダーの共同編集) に平安時代以前の日本において鹿をめぐる行われたある種の文化的・宗教的戦争を探求したエッセイを執筆しました。

ジェームズ・マンディバーク (社会福祉学・組織心理学博士号2000年卒) 最近、ウイスコンシン大学マジンソン校社会福祉学部からコロンビア大学社会福祉学部に教員としてのポジションを移行しました。さらに、非営利組織 (NPO法人) 設立を許可する新法を鑑みた日本における社会的企業の発展を研究するために社会科学評議会の安倍フェローシップを授与されました。社会的企業とは、非営利組織が社会的使命を促進するために利益または収益を稼得する活動に従事する場合を意味します。

ジェシカ・モートン (CJS 修士号2002年卒) ステッピングストーン・スクールで英才教育の一環としての日本語プログラムを開発、強化すると同時に、同校のサマー・デイキャンプのディレクターを務めました。また、ミシガン州立大学の言語教育・研究センター (CLEAR) による2005年夏期ワークショップ参加のためにCJS援助金を受け取りました。さらに、全米外国語リソースセンター (NFLRC) のオンライン夏期講習会「非ネイティブスピーカー教師のための日本語」に参加した全米15名の教師の一人でした。秋に故郷のシアトルに引越し、日本語の教職に就いています。

猿谷弘江 (社会学博士課程学生) 2005~2006年度バーバー・フェローシップを授与されました。

ピーター・シャピンスキー (歴史学博士号2005年卒) 5月に「Lords of the Sea: Pirates, Violence, and Exchange in Medieval Japan (海の領主: 中世日本の海賊、暴力、取引)」と題した博士学位論文の執筆を終了しました。また、イリノイ大学スプリングフィールド校でのテニューア・トラックのポジションを受任しました。

クリスティーナ・バシル (ALC 博士課程学生) フルブライト・ヘイズ奨学金とイトウ奨学金の両方を授与されました。2005~2006年の学年度を京都での研究に当てます。

日本研究センターはここに2005~2006年度教員向け研究補助金の受理者を発表します。個人またはグループのプロジェクトへの補助金は、日本の社会および文化の側面を調査する研究を支援する目的で提供されています。当年度の受理者および各自のプロジェクトの説明リストは以下のとおりです。

ブルース・ベルザウスキー (交通研究所研究員) プロジェクト「Building a Knowledge Economy: Trends in the Japanese Automotive Industry (ナレッジ経済の構築: 日本の自動車業界のトレンド)」のために資金援助を受けました。このプロジェクトは、日本が経済を牽引する技術的優位性の獲得と革新の促進を試みる中で日本国内において起こっている劇的な変化に関して、特に自動車業界に重点を置いて、洞察と前後関係を提供するものです。日本のナレッジ経済の構築における長期トレンドを理解するためにマクロ(国家)、メゾ(業界)、ミクロ(企業)の三レベルが検討されます。

神保真人 (家庭医学臨床医学助教授) 研究「Perspectives of Japanese Men and Women on Cancer Screening (がん検診に対する日本の男女の見解)」のための援助金を授与されました。がんは、1981年以来、日本における死因の第1位を占めています。日本国政府は、がん検診を促進するべく、地方自治体の地域コミュニティに対して住民に乳がん、子宮頸がん、大腸がん、胃がんの検診を提供するための資金調達を行っています。こうした努力にもかかわらず、日本のがん検診率は米国の率を下回っています。このプロジェクトの目標は、日本人の成人男女のこの種のがん検診に対する経験、知識、態度、考え、価値観についてモデルを形成し、そのモデルを米国で現在利用されているトランスセオレティカル・モデル(行動変容モデル、TTM)と比較することによって日本人の成人男女のがん検診行為の促進において効果を改善するためのトランス

セオレティカル・モデルに拡大することにあります。

北山忍 (心理学教授) プロジェクト「Culture and Attention: Development of Holistic Attention in Japanese Children (文化と注意力: 日本の子どもにおける包括的注意力の発達)」への資金調達を受けました。北米のミドルクラスの文化に属する人々は一時に一つの対象物に注意力を集中する能力が高いもののその前後関係を無視するところ、その一方で、アジアの多くの文化に属する人々は目の前の対象物とその前後関係の両方に注意力を分散する能力が高いものです。現在のところ、こうした文化的に起きる注意力がどのように学習され内面化されるのかについては、ほとんど知られていません。このプロジェクトから取得される定量・定性データは、日本と米国のそれぞれの文化的前後関係に関連した実施行為への積極的参加と意味合いを通じて注意力がいかに発達するかを明らかにします。

レオン・バスタラン (建築学&都市計画学名誉教授) プロジェクト「Accommodating Workplaces and Workspaces for an Aging Japanese Workforce (高齢化しつつある日本の労働力のための職場と職空間の適応)」のために資金調達を受けました。日本は労働力の高齢化と低出生率に直面しています。このプロジェクトの目標は、高齢労働者の生産性の改善または維持ならびに彼らの健康と快適さ、雇用者のかかる適応に関する実務行為、高齢化する労働力と職場・職空間の適用に関する政策イニシアチブのために、どのようなデザイン上の適用がこれまでになされているか、そしてどのようなデザイン上の適用が今後なされる必要があるかに関し、高齢労働者の職場・職空間経験を調査することにあります。これは長期的研究の第一段階を構成するもので、研究の最終目的は、高齢労働者の雇用の成功と快適な労働を支えるために重要な職場デザインのソリューションを提案することです。

ジェニファー・ロバートソン (人類学教授) **ルース・ツォファール** 教授 (近東研究) との共同プロジェクト「National Unhistory: War Museums and the Aesthetics of Erasure in Japan and Israel (国家的非歴史: 日本およびイスラエルにおける戦争博物館および抹消の美学)」のために援助金を受け取りました。イスラエルと日本は、場合によっては非対称的に、幾つかの顕著な特徴を共有しています。そのような特徴の一つは、戦争に強調される歴史です。戦争が、日本とイスラエルでは日常生活の構成ならびに国家や個人としての構想の両方において発展性のある動的な力となってきたことは、両国の戦争(平和)博物館という繁栄「産業」によって十分に証拠づけられます。戦争の「博物館化」の過程および戦争(平和)博物館の設計開発は、日本でもイスラエルでも研究が不足している課題です。このプロジェクトは、代表的な日本とイスラエルの戦争美術館の設計と内容に関する革新的、学際的、比較的な解釈となり、関連的に、それらが具現する国家の歴史化と非歴史化の様相の分析となります。この援助金は、東京にある数軒の戦争(平和)博物館での民族誌学的フィールドワークの実施に役立ちます。

グレチェン・ウィルキンス (建築学&都市計画学助教授) プロジェクト「Michigan Architecture Papers: Atelier Hitoshi Abe (ミシガン建築白書: 阿部仁史アトリエ)」への資金調達を受けました。『Michigan Architecture Papers』シリーズの寄与編集者として、日本人建築家の阿部仁史の仕事に焦点を当てています。阿部の仕事は、設計過程と建築物制作に対して新しいアプローチを探索している日本の建築家の新興世代を代表するものです。この援助金は、彼の仕事を文書記録に録り、画像と著作権を取得し、彼のアトリエを訪問するための日本出張に役立てられます。



アジア図書館旅費補助金 (トラベルグラント)

2005年7月1日から2006年6月30日までの間にミシガン大学アジア図書館のコレクションの利用を希望する他機関の日本研究者を対象に、旅費、宿泊費、食費、コピー代として最高700ドルの補助金を提供しています。図書館に関する詳細情報につきましては、<http://www.lib.umich.edu/asia>をご覧ください。または図書館アシスタント (734-764-0406) にご連絡ください。

関心のある方は、申請書、研究およびコレクションの利用の必要性に関する簡単な説明 (250ワード以内)、利用を希望するリソース・リスト (応募前に、利用希望のリソースが同図書館にあるかどうかをオンライン目録でご確認ください)、現行の履歴書、予算、旅程案を、当センター宛に提出してください。

当センターでは、電子メール (umcjs@umich.edu)、または以下の住所宛の郵便での申請を、2006年5月31日まで受け付けます。

Asia Library Travel Grants
Center for Japanese Studies
Suite 3640, 1080 S. University
The University of Michigan
Ann Arbor, MI 48109-1106

この補助金は、米国教育省の「タイトルVI」(高等教育法第6章) 助成金により部分的に支援されています。

2005~2006年度CJS学生奨学金

同窓会奨学金:

照山絢子 (人類学博士課程)

CJS基金奨学金:

マーニー・アンダーソン (歴史学博士課程)、ピーター・アレックス・ベイツ (ALC博士課程)、
趙秀美 (チョ・スミ) (人類学博士課程)、モニカ・キム (歴史学博士課程)、
ホイット・ロング (ALC博士課程)、ブリジット・ラブ (人類学博士課程)、
ケリー・ローウィル (歴史学博士課程)、尾野嘉邦 (政治学博士課程)、
ミシェル・ブローシェ (ALC博士課程)、齋藤弘久 (社会学博士課程)、
猿谷弘江 (社会学博士課程)、梅田道生 (政治学博士課程)、
クリスティーナ・バシル (ALC博士課程)、ノリコ・ヤマグチ (CJS修士課程)

グッドマン奨学金:

趙秀美 (チョ・スミ) (人類学博士課程)、アンドレア・ランディス (ALC博士課程)、
梅田道生 (政治学博士課程)

メロン財団複数年奨学金:

金瑾瑛 (キム・クンヨン) (歴史学博士課程)

ラッカム・ブロック奨学金:

シャン・チバス (CJS修士課程)

夏期FLAS奨学金:

ジョシュ・アイゼンマン (CJS修士課程)、モニカ・キム (歴史学博士課程)、
ヘザー・リトルフィールド (CJS修士課程)、リエン・ヨン (CJS修士課程)

学年度FLAS奨学金:

ジョシュア・イリザリ (人類学博士課程)、アンエリス・ルアレン (人類学博士課程)、
ブリジット・ラブ (人類学博士課程)、リエン・ヨン (CJS修士課程)

学生向け奨学金

プログラムに

関する情報は、

[http://www.](http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/students.html)

[umich.edu/](http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/students.html)

[~iinet/cjs/](http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/students.html)

[funding/](http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/students.html)

[students.html](http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/students.html)

から入手でき

ます。

お知らせ



左から：岡まゆみ（ミシガン大学日本語講師）、チャンスー・リー（ミシガン大学学生）、アレクサ・ダウイング（ミシガン大学およびルドルフ・スタイナー高校の学生）、ドヨブ・リー（ミシガン大学学生）、花井善郎（ミシガン大学日本語講師）、近藤純子（ミシガン大学日本語講師）

ミシガン大学の学生が スピーチコンテストで 好成績を収めました

去る3月19日土曜日、ミシガン大学の学生3名が、デトロイト市にある日本国総領事館が後援する第10回年次日本語スピーチコンテストに入賞しました。ドヨブ・リーが、「When Ideal Meets Reality（理想が現実と出会う時）」と題したスピーチで大学生部門第1位に輝きました。この優勝スピーチにより、滋賀県（ミシガン州の姉妹県）での1週間のホームステイを含む日本往復航空券を授与されました。また、チャンスー・リーは第2位に入賞し、アレクサ・ダウイングは特別賞を受賞しました。これら学生は、コンテスト出場願書を送付した82名の学生と競い合いました。この中から最終選考に残った18名がスピーチを行い、構成、内容、流暢さ、記憶力などの点で審査を受けました。

夏期ワークショップ援助金 受賞者が選ばれました

CJSは、ミシガン州の日本語教師3名に、ミシガン州立大学の米国教育省タイ

ルVI外国語リソースセンターである言語教育・研究センター（CLEAR）での夏期ワークショップに参加するための援助金を授与しました。ブリジット・クーバー（セクストン高校、ランシング）、ルシニア・ユバンクス（パートン・インターナショナル高校とオークランド・コミュニティ・カレッジ、デトロイト）、ジェシカ・モートン（ステッピングストーン・スクール、アン・アーバー）が、ワークショップで何を学びたいかに関するエッセイに基づいて、援助金を授与されました。



日本家族健康プログラム、 ケアを始めてから10周年を 祝福しました

ミシガン大学家庭医学部の日本家族健康プログラム（JFHP）は、ミシガン州南東部在住の日本語を話す人々を対象に日本文化を考慮した総合保健サービスを提供していますが、2004年秋、10周年を記念し、イースト・アン・アーバー・ヘルスセンターでオープンハウス祝賀会・患者感謝デーを開催しました。

100名を超える大人子供が日本の伝統音楽や活気あふれるエンタテインメントを楽しみました。その午後のハイライトは、ミシガン大学芸術&デザイン学部の犬塚定志教授の指導による楽焼体験でした。

ミシガン大学準教授でJFHPディレク

ターであるマイク・フェーターズ医学博士はこう述べました。「素晴らしい成長を遂げたエキサイティングでやりがいのある10年間でした。この間、私たちを支えてくださった数多くの患者さんと友人たちに変な感謝しております。オープンハウス祝賀会では多くの懐かしい人々に会い、直接『ありがとう』と言えたことを非常に嬉しく思いました。」

フェーターズ教授は、交換留学高校生として日本で1年間を過ごして以来の日本文化への関心に基づいて同プログラムを発案、開始しました。日本語が流暢なフェーターズ教授は、アン・アーバー、デトロイト地域の日本語を話す人々に総合保健サービスを提供するビジョンを抱いたのです。このプログラムは、患者の治療に加え、教育的要素と総合的研究活動も網羅しています。

詳細情報につきましては、<http://www.med.umich.edu/jfhp>をご覧ください。

「日本語テーブル」への お誘い

フリーマン基金からの支援により、2004年秋学期に日本語がレジデンシャル・カレッジ集中語学プログラムに加えられ、非常に意欲のある学生15名が1年間の日本語初級・中級セミ・イマージョン・コースを成功裡に終了しました。言語テーブルは、デイリー・ランチ・テーブルやウィークリー会話テーブルを含め、同コースのカリキュラム活動であり、学生は熱意と好奇心をもって出席しています。彼らは定期的または不定期的を問わず日本語を話す訪問者があることをとりわけ楽しんでます。どうぞ日本語でのカジュアルな会話に参加してください！具体的な時間と場所につきましては、2005年9月以降に同プログラム講師の佐藤哲也まで電子メール（satoot@umich.edu）でご連絡ください。どうぞ宜しくお願いします！

動物、映画、そして平安時代の 女性作家に関する新刊

第1ページから続く

研究は、西洋の映画および西洋の近代性の問題にほとんど排他的に集中しています。トーマス・ラマール（マックジル大学）著『Shadows on the Screen: Tanizaki Jun'ichirō on Cinema and "Oriental" Aesthetics (銀幕の影：映画の谷崎潤一郎と「オリエンタル」美学)』（日本研究シリーズ第52巻、ISBN 1-929280-32-7、クロス装丁60.00ドル、ISBN 1-929280-33-5、ペーパーバック25ドル）は、この問題について挑戦的な新しい再評価を提供するものです。ラマール教授は、文豪谷崎潤一郎の長らく疎かにされていた映画作品の徹底した注釈つきの翻訳に加え、谷崎が彼の映画作品の中で非西洋の近代化の一時的矛盾をいかに捉えたかについて、独自で不断の分析を伴う一連の意見を提供しています。

谷崎の映画のストーリーおよび脚本は、大半が1917年から1926年の間に執筆されたもので、新たに映画化された近代世界に潜在する人種的、性的な倒錯の探求をもって、読者の心を喜ばせたり乱したりし続けています。谷崎の「オリエンタリスト」的エッセイは、映画作品と合わせて読むと、それらの映画の源を裏切り、国家のアイデンティティと殖民主義のアンビバレンスの間、伝統主義と映画の近代主義の間の深遠な結びつきを暴露します。『Shadows on the Screen』は、谷崎の映画作品の

翻訳と分析を通じて、日本における映画と映画評論の出現、および日本の近代性の問題の両方に、貴重な歴史的指針ならびに概念的指針を提供します。

ジョン・R・ウォレス（カリフォルニア大学パークレー校）著の『In Objects of Discourse: Memoirs by Women of Heian Japan (平安日本の女性による日記)』（日本研究シリーズ第54巻、ISBN 1-929280-34-3、クロス装丁65.00ドル）は、10世紀および11世紀の平安時代の女性による日記4作品を、それらの個別の特徴およびそれらが平安文学により広範囲に示唆するところに関して分析したものです。著者は、これら平安時代の女流日記作家を、男性のロマンス相手の受動的な対象として取り扱わず、むしろ自分たちの人生の困難な状況に対して部分的に自分の経験を書くことによって戦略的に対抗した個人として捉えています。ウォレスはさらに、これら日記を日本の古典時代の文語散文の修辞および構成の特徴を理解するための豊富な情報源であると認めています。ウォレスは、新開発された自国語の文字体系、日記をする口実、作家の社会的前後関係などの歴史的問題を取り上げた後、『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』を、文体的側面、修辞的ツール、ミシェル・フーコーの「権力のネットワーク」、話術的構成の点から、それぞれ精査しています。その成果として、素晴らしい平安女流作家の研究が生まれました。

日本研究センター出版会総編集長
ブルース・ウィロビー
(Bruce Willoughby)

9月

14日 レセプション:トヨタ招聘客員教授オブラ・ゴールドSTEIN = ギドニ教授の歓迎レセプション。午後4時半~6時、インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。

22日 講演*:「Rise of the Gei Boi in Postwar Japan (戦後日本におけるゲイ・ボーイの出現)」オーストラリア国クィーンズランド大学批評・文化研究センターARC博士研究員、マーク・マクレランド。

29日 講演*:「Unmooring the Present: Overcoming Modernity and the Question of the Historical Unconscious (現在のとも綱を解く:近代性と歴史的無意識の問題を克服する)」ニューヨーク大学東アジア研究・歴史学教授、ハリー・ハルトウニアン。(ミシガン大学歴史学科歴史研究所との共催。)

30日 無料映画上映:**『ユンボギの日記』大島渚監督、1965年、30分。『とべない沈黙』、黒木和雄監督、1966年、110分。

10月

4日 特別講演:日本のTVタレント、ケント・デリカット。午後6時半。講演後のレセプション:インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。無料、一般公開。

6日 講演*:「Fin de Millennium Football in Japan: A Sport and an Age for 'Individuals' (日本の世紀末のフットボール:『個人』のスポーツの時代)」バトラー大学歴史学・人類学助教授、エリス・エドワーツ。

7日 無料映画上映:**『新宿泥棒日記』大島渚監督、1968年、96分。

12日 アーティスト実演:日本の金属美術工芸家、すぎもりえいとく。日本の伝統的緑青技法の実演。午前10時。ミシガン大学ノースキャンパス建築・デザイン学科メタル・スタジオ。一般歓迎。

13日 講演*:「Beyond Language: Yi Yang Ji's *Yuhi* and Spirit Possession à la Lacan (ことばを越えて:ラカンを通して読む李良枝の『由熙(ユヒ)』)」ミシガン州立大学言語学・語学部助教授、キャサリン・リュウ。

14日 無料映画上映:**『COWBOY BEBOP 天国の扉』、渡辺信一郎監督、2001年、98分。

20日 講演*:「The Genealogy of the Concepts of 'A-Nationality' and 'Suit' in Japanese Anime/Cinema (日本のアニメ/映画における『無国籍性』と『スーツ』概念の系譜学的考察)」和光大学表現文化学教授、上野俊哉。

21日 無料映画上映:**『イノセンス』押井守監督、2004年、99分。

21日 映画討論会:上野俊哉、阿部マーク・ノーネス。映画上映後実施。詳細はCJSウェブサイトを参照。

27日 講演*:「Shift to Revitalization: Language Policies toward the Ainu Language (再活性化への転換:アイヌ語に対する言語政策)」北海道教育大学旭川校言語学助教授、井筒勝信。

28日 無料映画上映:**『バラの葬列』松本俊夫監督、1969年、105分。

11月

3日 講演*:「Isomorphic Maps: The Abandoned Geography of Mid-century Japanese Left Cinema (等角投影図:20世紀半ばの日本左翼映画において放棄された地理)」カリフォルニア大学アーバイン校比較文化学・映画&メディア研究助教授、ジョナサン・ホール。

4日 無料映画上映:**『略称連続射殺魔』足立正生監督、1969年、86分。

4日 映画討論会:ジョナサン・ホール、阿部マーク・ノーネス、足立正生監督(ビデオ・コンファレンスにて)。映画上映後実施。詳細はCJSウェブサイトを参照。

10日 講演*:「Working at the Tokyo Trial and Other Memories of the Occupation (東京裁判での仕事およびその他占領の追憶)」元沖縄総領事・フィリピン担当ディレクター・国防大学教授、ウルリツ・ストラウス。

11日 無料映画上映:**『さらば箱舟』寺山修司監督、1984年、127分。

17日 講演*:「Yakyu vs. Baseball (野球対ベースボール)」シアトル・マリナーズ、パシフィック・リム・オペレーションズ・ディレクター、テッド・ハイド。

18日 無料映画上映:**『殺しの烙印』鈴木清順監督、1967年、98分。

12月

1日 講演*:「Imamura Shohei and Eco-Film Criticism (今村昌平とエコ映画批評)」ミネソタ大学日本文学・文化研究助教授、クリスティーン・マラン。

2日 無料映画上映:**『神々の深き欲望』今村昌平監督、1968年、172分。

2日 映画討論会:クリスティーン・マラン、阿部マーク・ノーネス。映画上映後実施。詳細はCJSウェブサイトを参照。

1月

7日 特別イベント:お餅つき。午後1時~4時、インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。

12日 講演*:「The Logic and Beauty of Japanese Noh Drama Taiko Music (日本の能太鼓音楽の論理と美)」ミシガン大学音楽学・民俗音楽学名誉教授、ウィリアム・マルム。

19日 講演*:「Little Boy and Fat Man: The Myth of Dropping the Atomic Bomb. Who is the Real Devil? (リトルボーイとファットマン:原爆投下の神話。悪魔は誰?)」パロディスト、ビッグバング・インク社長、マッド・アマノ。

26日 講演*:「The Political Economy of Family Policy in Japan (政治経済学的視点から見た日本の家族政策)」ウェスタン・ミシガン大学政治学助教授、プリセラ・ランバート。

*講演はすべて、別途通知のない限り、ソーシャルワークビル1636号室にて正午に開始されます。スーン・レクチャーと称されるこれら講演は、米国教育省からの「タイトルVI」助成金を受けています。

**映画上映はすべて、ローチ・ホールのアスクウィズ・オーディトリウムにて午後7時に開始されます。すべて英語字幕付き日本語によるものです。

最新情報につきましては、CJSイベント・カレンダー、<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/calendar.html>をご覧ください。

近況をお知らせ下さい

CJSでは、教員、学生、卒業生の皆様全員からの近況のご報告をお待ちしています。引越された方、引越し予定のある方、CJSニュースレターを定期的に受理されていない方は、電子メール (umcjs@umich.edu)、または右記の住所まで郵便にて、ご連絡ください。

D E N S H O

伝書



ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 3640
Ann Arbor, MI 48109-1106
電話: (734) 764-6307
ファクシミリ: (734) 936-2948
電子メール: umcjs@umich.edu
ウェブサイト: <http://www.umich.edu/~iinet/cjs/>

所長: マーク・D・ウエスト
アドミニストレーター: 深澤ゆり
プログラム・アソシエイト: ジェーン・オザニッチ
学務アシスタント: ジュリー・A・ワインダー
アウトリーチ・コーディネーター: G・P・ウィットピン
オフィス・アシスタント: サンドラ・モラスキー

ミシガン大学日本研究センター出版会
Center for Japanese Studies
Publications Program
University of Michigan
1085 Frieze Building
105 S. State Street
Ann Arbor, MI 48109-1285
電話: (734) 647-8885
ファクシミリ: (734) 647-8886
電子メール: ii.cjsspubs@umich.edu
ウェブサイト: <http://www.umich.edu/~iinet/cjs/publications>

出版会ディレクター: 殿村ひとみ
総編集長: ブルース・ウィロビー

CJS執行委員会: 江森祥子、北山忍、ジェニファー・ロバートソン、ジョナサン・ズウィッカー、メアリベス・グレービル (職権上)、仁木賢司 (職権上)、マーク・D・ウエスト (職権上)

Regents of the University of Michigan: David A. Brandon, Laurence B. Deitch, Olivia P. Maynard, Rebecca McGowan, Andrea Fischer Newman, Andrew C. Richner, S. Martin Taylor, Katherine E. White, Mary Sue Coleman (ex-officio)

The University of Michigan, an equal opportunity/affirmative action employer, complies with all applicable federal and state laws regarding non-discrimination and affirmative action, including Title IX of the Education Amendments of 1972 and Section 504 of the Rehabilitation Act of 1973. The University of Michigan is committed to a policy of non-discrimination and equal opportunity for all persons regardless of race, sex, color, religion, creed, national origin or ancestry, age, marital status, sexual orientation, disability, or Vietnam-era veteran status in employment, educational programs and activities, and admissions. Inquiries or complaints may be addressed to the University's Director of Affirmative Action and Title IX/Section 504 Coordinator, 4005 Wolverine Tower, Ann Arbor, MI 48109-1281. 734.763.0235, TDD 734.647.1388. For other University of Michigan information, call 734.764.1817.

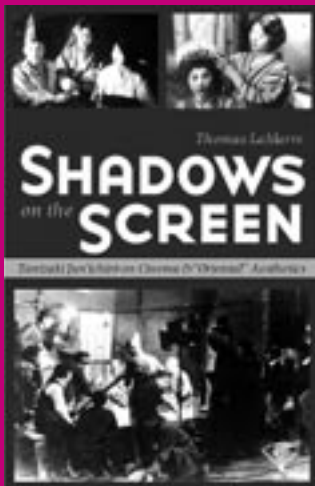
「伝書」編集人: ジェーン・オザニッチ
「伝書」翻訳: 村上まどか
「伝書」デザイン: ワグナー・デザイン
「伝書」制作: プリンテック



ミシガン大学
日本研究センター

2005年秋

日本研究センター出版会から 現在発売中の新刊です



『Shadows on the Screen: Tanizaki Jun'ichirō on Cinema and "Oriental" Aesthetics (銀幕の影：映画の谷崎潤一郎と「オリエンタル」美学)』
トマス・ラマール著



『JAPANimals: History and Culture in Japan's Animal Life (ジャパニマル：日本の動物ライフの歴史と文化)』
グレゴリー・M・フルーグフェルダ、
ブレット・L・ウォーカー共同編集

DENSHO

伝書



ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 3640
Ann Arbor, MI 48109-1106